



外来診療の際の安全対策について

石橋 正史

日本鋼管病院・こうかんクリニック皮膚科部長

病院に併設されているクリニックの院長を務めています。クリニックは、内科系、外科系の診療科から構成され、1日の外来患者数は700～800人です。最近、クリニック内で発生した事例をお伝えしたいと思います。

双極性障害にて当院精神科外来通院中の50歳代の男性が精神科外来を受診しました。精神科の診察室で医師による診察中に、暴力や暴言はみられなかったものの「悪魔を殺しに行かないといけない」「ナイフをもってきている」との発言があり、精神科医により、診察室の机に設置された緊急呼出ボタンが押されました。精神科診察室の外の待合室に設置された赤色灯が点滅し、警備室の呼出アラームと外来医事室の呼出アラームが作動しました。

赤色灯点滅に気づいた職員が現場に駆けつけ、院内Vコール(violence call)を依頼するもやり取りがうまくいかず取り消され、別のスタッフがVコールを依頼しました。その間に呼出アラームを受けた警備員が精神科診察室に駆けつけ、精神科医を介して全長20 cm、刃渡り10 cmの果物ナイフを受け取り、精神科医師の要請で警察に通報しました。当クリニックには警察OBの事務局員もおりますが、たまたま休みでした。

そのころになり、Vコールにより大勢の職員が診察室付近に集まりだしました。当該者を別のフロアの部屋に移動させ、到着した警察官5名により事情聴取ののち、警察署に連行、措置診察、措置入

院の流れとなりました。

今回の事例は精神科ならではの、といえるかもしれませんが、当該者は最近、精神科以外の診療科で外来に通院し、入院、手術も行われており、以前、皮膚科の外来にも受診していたこともあり、このような事案は皮膚科外来でもおこりうることもいえるかと思います。

今回は刃物を使用されることはありませんでしたが、まず最優先に考えなければいけないのは、自分自身やスタッフ、ほかの患者の安全を確保することです。診察室に複数の出入口をつけ、患者とスタッフの出入口を別々にとることで避難経路を確保する、施設内で人目につきにくい場所をできるだけなくす、相手を刺激しない、緊急時の連絡手段として、非常ボタンや緊急PHSコール体制を整備する、できるかぎり1対1では対応せず、ほかのスタッフに応援体制を整えるように依頼するといったことが必要かと思います。そして、平常時から非常時の訓練を実施し、対象患者を診察室から待機場所まで移動させて警察が来るまでの対応につき、具体的なシミュレーションを行う必要性を認識しました。